

平成27年度 学校自己評価システムシート（県立熊谷特別支援学校）

目指す学校像	児童生徒一人一人の教育的ニーズに応じた適切な教育を推進し、「生きる力」を育成するとともに、地域に理解される学校
--------	---

重点目標	1 子どもの実態や個性に応じた授業の実施と改善、教員の専門性の向上に努める。 2 開かれた学校づくりと地域の実情に根差したインクルーシブ教育システムの構築を進める。 3 子どもの健康と安全安心に配慮した教育環境の整備に努める。
------	---

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	5名
	生徒	2名
	事務局(教職員)	6名

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学 校 自 己 評 価				学 校 関 係 者 評 価				
年 度 目 標				年 度 評 価 (2 月 1 日 現 在)				
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	<p>○個々の児童生徒の教育的ニーズに応じた支援がまだ十分ではない。各学習グループにおいて、児童生徒一人一人が成長し「生きる力」が育つ授業づくりが課題である。</p> <p>○本校のキャリア教育は、児童生徒の実態の多様化によって内容が様々である。教員や保護者双方がキャリア教育についての理解を深め、教育活動を充実させていくことが必要である。</p> <p>○姿勢や身体の動きの指導・摂食指導・ICT機器の活用等多様な教育的ニーズへの対応が課題である。また他校と連携しお互いの研修会に参加するなどして学び合いのネットワークを構築する。</p>	<p>①児童生徒の成長発達を実現する授業づくり</p> <p>②キャリア教育の視点をふまえた授業づくり</p> <p>③教職員の指導力の向上</p>	<p>①学部間の連携や個別面談・アセスメントにより児童生徒の特性を捉えた上で教育支援プランA・Bを作成する。プランに基づいた適切な授業や支援、教材の工夫を行うことによって児童生徒の成長発達を実現させる。</p> <p>②キャリア教育について昨年度に引き続き「生活を豊かにする授業作り」をテーマに研究部を中心に教職員の研修を行う。教育的ニーズに基づいたキャリア教育の視点を踏まえた指導支援を行う。キャリア教育の全体計画に基づき教育支援プランA・Bの作成と授業の実施を行う。保護者とともに成果を確認する。キャリア教育についての項目を保護者アンケートに加える。</p> <p>③身体・認知・食事・情緒・ICT機器の活用など、ニーズに応じて自立活動部教員と担任による指導支援を工夫しながら進める。自立活動研修、自立活動連絡会、希望研修、臨任研修や新転任者研修等を年間を通じて計画的に行う。近隣の高校などと連携して授業研究を行い、授業の質を高める。</p>	<p>①児童生徒の心身の特性に合った、適切な授業や支援を行うことにより成功体験を積み自信をつけ、「できた」という喜びと「もっとやりたい」という意欲を高めることができたか。</p> <p>②保護者の理解を得てキャリア教育の視点を踏まえた授業を実施し、児童生徒のキャリア発達を促せたか。また、児童生徒一人ひとりがキャリア発達の面から成長が見られたと半数以上の保護者が実感できたか。</p> <p>③教員の専門性が向上し、児童生徒の学習上・生活上の困難を軽減する授業を実施できたか。すべての教員がICT機器の活用をしたか。近隣の高等学校などと連携して授業を行うなど、学び合いのネットワークの構築を進めることができたか。それにより、授業の質を高めることができたか。</p>	<p>・教育支援プランA・Bの作成にあたっては、前年度からの申し送り、保護者との面談、太田ステージ・NCプログラムなどでのアセスメント等によりスムーズに作成できた。また、学年会・類型会等を通して情報・意見交換を図り、共通理解のもと授業や児童生徒の支援を行った。また、必要に応じてケース会を実施し、学習グループの再検討、指導内容や方法の充実を進めた。学習到達度チェックリストを用い、目標設定や授業作りを生かすことができた。各学部でいろいろな教科、場面で積極的にiPadを活用し児童生徒の学習意欲を引き出した。また、スイッチ等の補助具を使って意思表示を引き出ししたり、生徒が自分の力で作業を行った。</p> <p>・各学部の類型や学習グループで、キャリア教育の視点を踏まえた学習計画を作成し、支援プランに明記し個別の目標を立てて授業を行った。特別支援教育課の支援訪問での研究授業では、生活単元学習の授業を行い、研究協議会ではキャリア教育の視点を踏まえた指導について高く評価された。各学部で研究日に全校のテーマ「生活を豊かにする授業作り」にそって研究協議をし、授業づくりに生かすことができた。児童生徒の実態に応じて生活意欲の向上を目指す授業づくりは、各学部で行われ成果を上げた。キャリア教育のアンケートについては、今年度は紙面でのアンケートではなく、支援プランについての保護者面談時に評価を行った。iPadを使うことで意思表示のできない生徒が自己選択ができるようになりつつあるという保護者の意見が聞かれた。アンケートでは進路指導の項目で76%の保護者が満足しているという結果となった。</p> <p>・教職員は身体・認知・食事・情緒・ICT機器の活用など学部会での研修や全校研修・校外での研修などいろいろな研修会に参加し知識や技術を学んだ。また、自立活動の専任教員が認知面での児童生徒の課題やiPadなどのICT機器の使い方担任に指導することで、教員の指導力が向上した。その結果書字が困難だった生徒が自分から字を書くようになったり、情緒的に安定したりした。ICT活用の研修会を夏季休業日中に3日間行い、授業や家庭でのICTの活用を推進した。</p> <p>・大里地区の中学校・高等学校の英語科研究協議会を本校で行い、本校の教員と熊谷西高のALTとの英語の研究授業を行った。研究協議は英語で行い、活発に意見交換が行われた。また、熊谷西高校の英語と地歴の授業の公開授業に高等部の教員が参加するなど異校種の学び合いが行われた。</p>	<p>B</p> <p>A</p> <p>A</p>	<p>・児童生徒・保護者のニーズにこたえる授業ができていたが、一部の教員達に頼りながらやっていた部分もあった。学校全体で教材を共有したり、本校で作成している教材集の活用をすすめる必要がある。</p> <p>・太田ステージ・NCプログラム等のアセスメントは特別支援教育の経験の浅い教員もできるよう研修を引き続きしていく。</p> <p>・2年間キャリア教育の研究を進めてきた。キャリア教育は来年度から行う「学校間ネットワーク」での共通テーマでもあるので、秩父特別支援学校、本庄特別支援学校と学び合いをし、よりよいキャリア教育がおこなえるよう研究の仕方を考えていく。</p> <p>・iPadを使っている教育的ニーズは高く、教員全体のICT活用能力の向上が課題である。自立活動は来年度から行う「学校間ネットワーク」での共通テーマでもあるのでキャリア教育同様、より良い自立活動の指導ができるよう研究を進めていく。</p>	<p>・一人一人を細かく見て把握し、目標を設定、授業を見直していることはとても良い。一人一人の実態を把握することはとても必要である。</p> <p>・キャリア教育について、卒業後の社会生活に役立つために学校で教えるべきことは何かよく考えるべきである。例えば、きまりを守るとか名前を覚えるとか給食のマナーとか。また、就労とはどういうことか、小学部段階から卒業後の進路先を見据えて、進路に関わる様々な情報を提供する機会を持つことも大切である。</p> <p>・卒業後の進路のことを考えると、高1・高2の時期はとても大切である。現場実習の回数をもっと増やしたらよいのではないかと。</p> <p>・iPadの利用はコミュニケーションの面から見てもよい。個人のものも活用して、保護者も一緒に活用できるようにするとよい。</p>
2	<p>○授業公開や全県一斉の学校公開は事前の案内の仕方によって参加者の数が大きく変わった。事前の案内を工夫する必要がある。</p> <p>○「アートで築こう地域の輪」活動は美術科と協力して全職員で組織的に取り組んできた。引続き定期的に作品交換をし、地域との繋がりを大切にしていく。</p> <p>○地域の就学前施設・保育所・小中高等学校等への要請に応じた支援を行ってきた。姿勢や身体の動きについての支援が中心だったが、認知学習面でのニーズもあるので支援方法について検討していく。</p> <p>○インクルーシブ教育を推進するため、交流及び共同学習・通常学校支援籍・特別支援学校支援籍活用促進を進める。そのために必要な合理的配慮に基づいた指導支援の進め方について研究をしていく必要がある。</p>	<p>①地域への情報発信と開かれた学校づくり</p> <p>②センター的機能の充実</p> <p>③インクルーシブ教育の推進</p>	<p>①学校公開や授業公開の案内を送付先のリストを再検討し郵送する。また、HP等でも確実に情報発信を行う。地域の作品展への参加、「アートで築こう地域の輪」活動での作品の交換などを全校で取り組む仕組みを進め本校の教育活動の理解啓発を図る。</p> <p>②市町村教育委員会と連携し、就学支援に係る必要な情報をより多く得る。地域の就学前施設・保育所・小中高等学校等の支援を行う。認知学習面での支援についても要請に応じ行う。</p> <p>③交流及び共同学習・通常学級支援籍・特別支援学校支援籍の取得を進める。その子に必要な合理的配慮など、相手校の担任と事前の打ち合わせを綿密に行い、充実した授業を受けられるようにする。更にICT機器の活用など、合理的配慮についての研究を行う。</p>	<p>①学校公開や授業公開、HPの更新、地域の作品展への参加、「アートで築こう地域の輪」活動で定期的な作品交換をし地域との繋がりを維持できたか。</p> <p>②市町村教育委員会と連携し、就学支援に係る情報の共有が図れたか。地域の就学前施設・保育所・小中高等学校等への要請に応じた支援が高められたか。特別支援教育の専門性を高めることができたか。</p> <p>③交流及び共同学習・通常学級支援籍・特別支援学校支援籍の活用促進が図れたか。相手校の積極的な取り組みを引き出し、特別支援教育の推進を支援することができたか。児童生徒に合理的配慮に基づき指導支援の事例やノウハウを提供し、充実した教育活動ができたか。</p>	<p>・学校公開は、就学前施設の幼児、保護者、職員で合計18名の参加があった。授業公開は2月末現在で5回実施し、計89名の参加があった。参加者も就学前の幼児、通常学校の生徒、自治会長、学校評議員、就学前施設職員、大学生、放課後等ディサービス、その他と、本校に関心のある方がたくさん参加した。「アートで築こう地域の輪」活動では、全教職員の中から担当者が15人決め、32カ所の事業所への担当者のあいさつ、作品回収と新しい作品との入れ替えがほぼ終了した。地域との繋がりがより深まった。そのほか、さくらロータリークラブよりiPad5台の寄贈という協力を得ることができた。</p> <p>・市町村教育委員会と連絡を取りながら就学支援を進めることができた。現在学区内の25カ所の就学前施設・保育所・小中高等学校に巡回教育相談等を行っている。巡回教育相談については、コーディネーターや自立活動部の教員を派遣し教育相談をすすめ、さらに学習面での指導も新たに行うなど、それぞれの学校の特別支援教育における専門性の向上に寄与することができた。学習面でもニーズに応じて相手校の担任と一緒に考えながら、就学前16件、小学校61件、中学校12件の相談に応じた。</p> <p>・支援籍学習では、保護者会等で支援籍についての説明を行うことで保護者の理解を得るようになった。支援籍の事前打合せで、本校で作成した支援籍のリーフレットを使い説明することで、充実した支援籍学習が行われた。通常学級支援籍は32名、特別支援学校支援籍においても5名実施した。特別支援学校支援籍では本校の合理的配慮を在籍校でも取り入れてもらうようにした。iPadやスイッチ教材などの機器の活用についても紹介しているところである。また、各学部・類型で学校間交流を各学部で行った。十年さらに、高等部では昨年度に引き続き八木橋デパートでのスイーツ文化祭に参加し、地域の人々や高等学校との交流を深めた。</p>	<p>A</p> <p>A</p> <p>A</p>	<p>・授業公開と学校公開は、目的の違った公開であるので、名称の変更も含め事前の案内を工夫する。「アートで築こう地域の輪」活動は主幹教諭と美術科が担当し進めてきた。文化祭後から始めた作品の搬入が年度末までかかかってしまった。来年度は額縁の購入をもって来てくれ、誇らしげにiPadで説明をしてくれた。夏季休業日中に先生方が施設に来てくれて音楽会を開いてもらってるがとても好評である。文化祭や運動会には見学に来ていただき、別の機会でもっと子供達とお年寄りとの交流ができるようになるとうい。</p> <p>・インクルーシブ教育を推進するための合理的配慮については研究が不十分であったので、県の資料も参考にしながら今後も研究をしていく必要がある。</p>	<p>・アートで築こう地域の輪活動などは分かりやすい。児童生徒が全員アートに関心があるわけではないと思うが個々の個性を生かして無理に枠にはめ込むことのないように工夫して欲しい。</p> <p>・アートで築こう地域の輪活動で施設に高等部の生徒が作品をもって来てくれ、誇らしげにiPadで説明をしてくれた。夏季休業日中に先生方が施設に来てくれて音楽会を開いてもらってるがとても好評である。文化祭や運動会には見学に来ていただき、別の機会でもっと子供達とお年寄りとの交流ができるようになるとうい。</p> <p>・支援籍学習では小中学校の受け入れ体制がしっかりしていない地域もある。受け入れ体制がしっかりしていないと子供が行きたがらないので改善してほしい。地域との繋がりは大切なので積極的に行ってほしい。</p>
3	<p>○ヒヤリハット報告の積極的な蓄積が不十分であり、学部によっては月0件ということもあった。十分に分析・活用ができるようヒヤリハットの掘り出し、蓄積と指導場面への活用を充実させていく。</p> <p>○昨年度久しぶりに保護者への引き渡し訓練を行った。今年よりは実際に近い避難訓練の見直し、昨年度半数程度であった防災メールの登録率の引き上げが必要である。</p> <p>○昨年度給食において食物アレルギー関係のヒヤリハットが1件あった。事故にはならなかったが、アレルギー対応についての対策を完全に整える。</p> <p>○保護者と教職員が協力して安全安心な医療的ケアの実施がおこなわれるべきである。そのため医療的ケア担当教員の養成を昨年度に引き続き進める。</p> <p>○大規模改修までに再調理の在り方についてのプロジェクトを作り、給食室での再調理にむけて準備を進める。</p>	<p>①ヒヤリハットの蓄積・分析による事故防止</p> <p>②大規模災害を想定した訓練の実施と準備</p> <p>③健康で安全安心な教育環境の整備</p>	<p>①ヒヤリハット報告の必要性を職員に周知し、企画委員会でのヒヤリハット報告を、管理職からではなく各学部より報告する方法に変える。学部単位での声かけや安全点検のチェックによりヒヤリハットの掘り出し・蓄積・分析・評価・活用を進める。</p> <p>②引き渡し訓練の実施とより実践的な避難訓練を実施する。登録相談窓口を設け防災メールの登録率を高める。防災マニュアルはHPにも掲載し職員への周知徹底を図る。</p> <p>③アレルギー事故0件を達成できた。医療的ケア担当教員を二桁育成できたか。看護教員、養護教諭、担当教員、担任で連携して安全な医療的ケアを実施できたか。学校給食の再調理改善プロジェクトを立ち上げ、大規模改修後の再調理についての準備を整えることができたか。</p>	<p>①毎回各学部から事例を出すことによりヒヤリハットの数を増やし、蓄積・分析をし活用事例をまとめる。教職員の意識を高め、事故0件を達成できたか。</p> <p>②引き渡し訓練の実施と実践的な避難訓練を実施できたか。防災メールの100%登録、防災マニュアルの職員への周知徹底を図れたか。</p> <p>③アレルギー事故0件を達成できた。医療的ケア担当教員を二桁育成できたか。看護教員、養護教諭、担当教員、担任で連携して安全な医療的ケアを実施できたか。学校給食の再調理改善プロジェクトを立ち上げ、大規模改修後の再調理についての準備を整えることができたか。</p>	<p>・類型会で検討して学部へ、そして全体へという情報共有の流れが定着してきた。学部によって意識に温度差はあるが情報共有することで日常の支援において意識を高く持つことができてきた。医療的ケアのヒヤリハットは45件(昨年度14件)であった。医療的ケア以外のヒヤリハットは86件(昨年度23件)で昨年度と比較するとかなりの数が出てきた。事故を未然に防ごうとする気づきの目が養われてきている。出されたヒヤリハットは集計・分析を行ない、危険な時間や場面等を教職員に周知した。</p> <p>・引き渡し訓練に関しては、児童生徒を保護者へスムーズに引き渡しができたが、悪天候下での災害時の避難口の確保や、送迎車の誘導などで課題を残した。しかし、訓練を通して教職員や保護者は、非常時の引き渡し方法について理解が進み、教職員への防災マニュアルの周知が進んだ。また、はじめてスロープを使わない避難訓練のシミュレーションを防災部員が試みた。防災メールの登録率は昨年度40%だったが今年度末は98%で、ほとんどの教職員・保護者が登録できた。</p> <p>・現時点でアレルギーの事故は0件である。アレルギー緊急時対応マニュアルに基づいた緊急時対応シミュレーションの実施を2学期中に行った。</p> <p>・県主催の担当教員研修は6名参加した。今年度の担当教員は3名であるが、県の研修を終えた教員は現在合計8名となり、児童生徒に関する実地研修を行えば担当教員になれる状態である看護教諭、養護教諭、担当教員、担任で連携して安全な医療的ケアを実施でき、事故0件であった。</p> <p>・再調理プロジェクトでは、栄養技師と調理員と再調理の実習、再調理を厨房で行っている先進校の視察、摂食についての研修を行った。再調理実習と他校の見学は全員の調理員が行った。今後は小委員会を含め具体的に厨房での再調理に向けて、再調理実習や研修会、レシピの研究、柔らかか食の試食を給食時に出すことができた。</p>	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>	<p>・ヒヤリハットを積極的に蓄積し、十分に分析・活用ができるよう来年度も引き続き取り組む。</p> <p>・保護者への引き渡し訓練や、多様な災害に対応した避難訓練の実施、スロープを使わない訓練などより実際に近い避難訓練を実施していく。</p> <p>・医療的ケア担当教員の養成を引き続き進める。</p> <p>・衛生管理を徹底し、引続き事故防止に努める。</p> <p>・アレルギー対応については、医師の診断を根拠にした対応を保護者を含め学校全体で共通認識をさらに図っていく必要がある。</p> <p>・大規模改修までに給食室での再調理にむけて、試食を出したり大規模改修前に行える再調理、別調理を徐々に入れていくなど準備を具体的に進める。</p>	<p>・ヒヤリハットの件数が昨年度の3倍に上がり、教職員に広く理解が深まった結果だと考えられる。昨年度1件あった食物アレルギーのヒヤリハットだが、アナフィラキシーショック対策として1年に1回はエビペンを使っているの研修などもしっかり行ってほしい。研修を行っていないといざというときに焦って使えない。</p> <p>・アレルギーがある子供に関しては家や施設と連携しコミュニケーションをとり、もしもの際にどう動くか、アレルギー対応マニュアルなどを使い全体で共通認識をしておく必要がある。1年でも成長すると状態が変わってくるので細かく見てほしい。</p>

